フィールド（現場）からの風 592

宮田守男

コロナの時期に不安な毎日を過ごした皆さんの入学式や新社会人として初出勤を迎えた4月の初々しい心は忘れてはいけない記憶だ。

地方公務員として勤めだした頃、法学者・末広厳太郎さんの役人の硬直ぶりを痛烈に皮肉った「役人学三則」。「役人たらんとする者は法規を盾にとりて形式的理屈という技術を習得することを要す」すなわち「いかに相手のいうことが条理にかなっていても容易に頭を下げず、条理などは無視して法規一点張りで相手をねじふせなくてはいけない」のが役人との教えに驚きを覚えた。とりわけ、将来の行動を制約するような言質を与える表現はしてはならないとの教えだが「適切に対応する」・「慎重に検討する」などの言質は、役人ばかりでなく政治家や不祥事をおこした組織代表者から度々聞こえてくる。

人生で脚光を浴びる人はほんの一握り。多くの人は平凡で堅実な一生を終えるが、そんな人々によって日々の平和は保たれ、人生に咲く花は美しく、実は大きな喜びをもたらすと作家の水上勉さんは生前「土くれの野に生きて花も実もあり」と言葉を残している。多くの人が退職後の第二の人生の時間を意義にするための歩みを願うばかりだ。

人生の時間を意義あるものに

東北大学高齢経済社会研究センターの吉田浩教授は、このまま選択的夫婦別姓を導入しない場合500年後はみんな「佐藤さん」になると試算、異常な未来社会に警鐘をしている。

子供たちの未来を思っていた時に新入学生のランドセルを見かけて思いだした「まど・みちお」さんの「朝がくると」の中に「ぼくが作ったものでない本やノートをぼくが作ったものでないランドセルにつめてせなかにしょって・・・いまにおとなになったならぼくだってぼくだってなにかを作ることができるようになるため」と。学校は何のために行くのかと詩が語っていた。どんな未来をつくれるのか、今生きている私たちの実践すべき正念場ではないだろうか。

推理作家の故佐藤洋さんのエッセー「鞄の提げ方」に、電車に乗った場合は、鞄の本体は体の前側に回すように。人間には後ろに目がないから、鞄を普通に提げていると、他人に迷惑になることもある。そんな周囲に配慮できる、子供に育ってほしいと願うばかりだ。（信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上）

3月下旬の白馬の雪景色、記憶に残る情景だ